

第1491回札幌市民劇場

(公財)道銀文化財団 道銀芸術文化助成事業

中島杏子チェロリサイタル

～音楽に寄せて～

2020年10月25日(日)

渡辺淳一文学館

主催：札幌市民芸術祭実行委員会、札幌市、(公財)札幌市芸術文化財団

主管：中島杏子チェロリサイタル実行委員会

ご挨拶

本日は、「中島杏子チェロリサイタル～音楽に寄せて～」にお越しいただき誠にありがとうございます。この日を無事に迎えられたことをこれほど嬉しく思ったことはありません。

2020年は、私が札幌で演奏活動を始めて10周年を迎える年となります。これまでの活動を支えて下さったすべての方に感謝の気持ちと、今後の札幌の文化芸術発展への志をお伝えしたいという思いで昨年からリサイタルの準備を進めてまいりました。しかしながら、今年に入ってから新型コロナウイルスの世界的流行が収まらず、各地で演奏活動がままならない日々が続いております。

今年3月に入り、出演を予定していたほぼすべての演奏会が中止となりました。公の場で表現することが出来なかったこの期間、色々なことを感じ、考えました。そして、今まで強い思いにかられて表現することを続けてきて、お客様に聴いていただき、私はその思いをなんとか消化してきたのだと気づきました。

この様な状況下で今回の演奏会を行うことにつきましては、開催の是非について悩み、考えを重ねました。しかし、やはり最後に行き着くのは、お客様に「生の音を届けたい」という私の思いでした。そして、厳しい状況の中で世界中の音楽家たちが少しずつ活躍の場を取り戻す努力を続ける様子に私自身も励まされ、開催を決めた次第です。

今回のリサイタルでは、ドイツロマン派の作品を取り上げます。曲目は、近年私が強く関心を持っているメンデルスゾーン作品からチェロソナタの第2番、彼を尊敬していたシューマン自身が「もっとも実り豊かな年」と呼んだ1849年に書かれた「5つの民謡風小品」、そして音楽仲間にも恵まれ、充実した室内楽作品を残したブラームスの「クラリネット三重奏曲」を演奏します。私の音楽人生の節目を共にした作品を集めて、シューベルトの歌曲「音楽に寄せて」を演奏会のテーマとしました。

開催にあたり、客席数の制限、お客様へのマスク着用・手指の消毒のお願い、演奏の合間の換気など会場と協力して感染予防対策を行います。

また、本日の様子は収録し後日インターネットで配信いたします。客席周りにも撮影用機材などが設置されますが、何卒ご了承くださいませよう、お願い申し上げます。

中島 杏子

Program

シューベルト 音楽に寄せて D 547

Franz Schubert (1797-1828) : An die Musik, D547

シューマン 5つの民謡風小品 Op.102

Robert Schumann (1810-1856) : Fünf Stücke im Volkston für Violoncello und Klavier, op. 102

1. Mit Humor
2. Langsam
3. Nicht schnell, mit viel Ton zu spielen
4. Nicht zu rasch
5. Stark und markiert

メンデルスゾーン チェロソナタ 第2番 二長調 Op.58

Felix Mendelssohn Bartholdy (1809-1847) : Sonate für Klavier und Violoncello D-dur, op. 58

- 第1楽章 Allegro assai vivace
- 第2楽章 Allegretto scherzando
- 第3楽章 Adagio
- 第4楽章 Molto Allegro e vivace

～ 休憩 ～

ブラームス 「5つの歌曲」から《愛の歌》 Op.71-5

Johannes Brahms(1833 - 1897) : Fünf Gesänge op. 71: V.Minnelied

(Bearbeitung für Violoncello und Klavier)

ブラームス クラリネット三重奏曲 Op.114

Johannes Brahms(1833 - 1897) : Trio für Klarinette, Violoncello und Klavier a-Moll, op. 114

- 第1楽章 Allegro
- 第2楽章 Adagio
- 第3楽章 Andantino grazioso
- 第4楽章 Allegro

シューベルト作曲 歌曲「音楽に寄せて」D 547

私は歌うようにチェロを弾くということに憧れ、留学時代はおもにその勉強に時間を費やした。いまもその夢にいつか手がとどくことを願いながら、チェロ弾きを続けている。歌曲が度々チェロで演奏されるのは、チェロの音色と音域が人の声に匹敵する美しさをもっているからだと思っている。

ドイツ歌曲の世界に大きな功績を残したシューベルトは、詩と音楽を密接に結びつけ、音楽で詩の世界を表現するだけでなく、音楽だけで詩を表現するほどの巧みな技術でドイツリートの様式を確立した。シューベルトの短い歌曲「音楽に寄せて (An die Musik)」は私が小学生の頃に聴いて感動した作品である。

その歌詞は「人生の荒波に揉まれた時でも音楽が幾度となく私を救い、癒してくれた。そのことに感謝している」という内容だ。詩の中ではMusik (音楽) ではなくKunst (芸術) と表現され、さらに歌詞の冒頭は芸術に対して敬愛を示すdu (あなた) という呼びかけで始まっている。

同じ旋律を繰り返す有節歌曲形式で書かれ、簡潔な内容でありながらも、音楽を純粋に愛する気持ちが感じられる美しい歌曲である。

シューマン作曲 5つの民謡風小品 op.102

ロベルト・シューマンは生涯でチェロのための作品を2つ残した。ひとつは『チェロ協奏曲』op.129、そしてもうひとつが『5つの民謡風小品』Op.102である。どちらもチェロ奏者が音大生時代から必ず勉強する重要な作品だ。『5つの民謡風小品』は、私がドイツの大学院修了試験に向けて当時の師匠と時間をかけて取り組んだ曲でもある。今回この作品を取り上げたのは、あの精神性の深い作品を10年経ったいま自分がどのように理解するのかを問いたかったからである。

シューマンは幼年期より音楽的な才能を示した。さらに、出版業を営む父親の影響で文学的素養を身につけていたことでも知られている。ピアニストとしての才能を発揮していたにもかかわらず、指の故障で作曲家に転身した後は、音楽雑誌への執筆なども精力的に行った。シューマンの音楽は、叙情性、文学的要素に溢れ、特にピアノ曲と歌曲の領域での貢献が大きかった。しかし、その創作活動は、青年期より度々訪れる精神的不調に左右されたようだ。

1840年代にドイツの音楽の中心地ライプツィヒで多忙な生活を送っていたシューマンは、活動の拠点をドレスデンに移した。彼は精神状態を悪化させていたが、拠点を移した後に少しずつ回復の兆しを見せる。新しい土地の気候が合ったためか、落ち着いて創作活動に取り組むことが出来たようだ。

『5つの民謡風小品』が作曲された1849年は、シューマン自身が「もっとも実り豊かな年」と呼んでいる。この年には他にも、クラリネットとピアノのための『幻想小曲集』Op.73、ホルンとピアノのための『アダージョとアレグロ』op.70 などの作品が書かれた。これらの曲もチェロで演奏されることがある作品だ。題名にもある通り、この作品は、民謡調の性格の強い短い5つの楽章から成る。

第1曲 Mit Humor(ユーモアをもって)

冒頭に書かれた'Vanitas vanitatum' (旧約聖書からの引用で、「人生は空しい」という意) という副題が印象的である。

第2曲 Langsam(ゆっくりと)

夢と現実のはざまのような子守唄。

第3曲 Nicht schnell, mit viel Ton zu spielen(速くなく、音を十分に保って)

孤独な足音が聞こえてきそうな冒頭とそれとは対照的な牧歌風の曲調にピアノの美しいアルペジオが寄り添い、再び冒頭の主題を迎える。

第4曲 Nicht zu rasch(急がずに)

今までの錯綜は何だったのかと思うほどの明快なマーチ。

第5曲 Stark und markiert (強くはっきりと)

力強いリズムと影のような憂いを伴う。チェロとピアノの3連符の掛け合いでクライマックスを駆け抜けるが、突如目の前で幕を下ろされたかのように終結する。

終曲に向けて唐突さを増していく展開に、正常な精神状態の者についてはついていけないのではないかと思う。しかし、その不安を引き起こすような感覚は、長く精神病を患い精神錯乱や幻聴を恐れ、少なからず「死」を意識していたシューマンが生きていた世界そのものなのかもしれない。

このたびの演奏にあたり、ほとんど脈絡のない楽章同士をどのように関連付けようかと悩んだが、1曲ずつが物語として完結し強いメッセージ性があることから、先に解説したように楽章ごとのイメージを明確に表現したいと思う。

メンデルスゾーン作曲 チェロ・ソナタ第2番 二長調 Op.58

フェーリクス・メンデルスゾーンは2つのチェロ・ソナタを作曲した。第一番Op.45は1838年、メンデルスゾーンが29歳の時に書かれ、若々しくも優雅で洗練された作風であるのに対し、その5年後に書かれた第二番Op.58は音楽的表現の幅も広がり、悠々と歌うチェロと生命力に溢れたピアノの掛け合いが印象的である。近年、私はメンデルスゾーンの室内楽作品に興味を持って取り組んでいるが、その音楽は限界を感じさせず、整った形式と、激しい表現の中にも品格を失わない知的さに魅了されている。

メンデルスゾーンは生まれながらにして裕福な家庭に育ち、教養の高い両親のもと幼い頃から恵まれた文化的な生活を送っていた。19世紀のドイツロマン派の色が強い時代だったにもかかわらず、メンデルスゾーンは創作においては古典的な形式を重んじた。また、バロックや古典派の作曲家の作品を研究して世に出したり、同じ時代の作曲家たちの活躍も支援するなど、自分の目で見て良いと感じたものは積極的に人々に紹介した。

『チェロ・ソナタ第2番 二長調』Op.58 が作曲された1843年の前後は、『交響曲第3番《スコットランド》』Op.52、劇付随音楽『真夏の夜の夢』Op.61、『ヴァイオリン協奏曲 ホ短調』Op.64などの傑作が多数書かれた時期にあたる。

この作品は、全部で4つの楽章から成る。

第1楽章 Allegro assai vivace

ピアノのはじけるように躍動するリズムと、チェロの開放的で大らかな旋律で始まる。駆け抜けるような勢いは終盤まで留まることなく、ピアノのリズムは多彩さを増していく。チェロの旋律のフレーズ終わりにピアノのうねりの頂点を合わせるなど、チェロが安易に流れてしまわないようなリズム上の作りになっており、生き生きとした音楽でありながら優雅な印象を与える。

第2楽章 Allegretto scherzando

スケルツォは「ひょうきんな」という意味を持つイタリア語だが、メンデルスゾーンのスケルツォは常に端麗なイメージがある。この楽章は、チェロの弦を弾くピツィカートを含む奏法でピアノと戯れるスケルツァンドである。中間のトリオ部分のメンデルスゾーンらしい流暢な旋律が特に魅力的だ。

第3楽章 Adagio

バッハの音楽を敬愛していたメンデルスゾーンは、ここで高潔なコラールを聴かせる。この作品の真髄といえるだろう。ピアノのアルペジオに乗ってチェロがレチタティーヴォ（語るように歌う歌唱法または奏法）風の旋律を奏でる。宗教的な響きに、信仰を持つ者でなくとも敬虔な気持ちに導かれるだろう。

第4楽章 Molto Allegro e vivace

前楽章の神聖な雰囲気から一変して、緊迫感のある序奏で始まる。しかし、そのイメージもピアノのユーモラスな動きによって明るく活発な最終楽章の主題に移行する。それぞれの楽器の技巧が最大限に駆使され、この作品の締め括りに相応しい華やかさで終わりを迎える。

ブラームス作曲 「5つの歌曲」から《愛の歌》 Op.71-5

《愛の歌》Op.71-5 は、ドイツの詩人ルートヴィヒ・ハインリッヒ・ヘルティ（1748~1776）の詩による歌曲である。夭折の叙情詩人ヘルティは、自然を深く愛し印象的な韻律と繊細な言葉感覚で多くの作曲家たちを魅了した。ブラームスもそのひとりであった。「いとしいあの人がいるだけで鳥の歌声や草花の色あいがより一層鮮やかに感じられる」という内容で、メロディは複数の詩節に渡って絶え間なく流れ、恋人のことを想い溢れる気持ちをよく表している。同じ旋律を繰り返す有節歌曲に形式は近いが、終結部は主題が展開し「あなたがいれば私の心はきっと in Wonne（よろこびに）blühen（花咲く）だろう」と同じ歌詞を2回繰り返し、感傷的になり過ぎずも情感の高まりを感じさせる歌唱で締めくくる。

ブラームス クラリネット三重奏曲 Op.114

ヨハネス・ブラームスは、晩年にクラリネットのための室内楽曲を4曲まとめて完成させた。そのうちの1曲が本日演奏する『クラリネット三重奏曲』Op.114 である。私がドイツでの留学を終えて札幌で活動を始めてすぐにこの曲と出会い、それ以来ずっと心の中にある曲だ。

ブラームスは、晩年にさしかかる1890年に『弦楽五重奏曲 第2番 ト長調』Op.111 という大作を書き上げた。しかし、この作品を完成させるにあたり、ブラームスは自分の腕の衰えを感じずにはいられなかった。『弦楽五重奏曲』Op.111を仕上げた直後に、出版社に向けて「これ以上のものはもう書けない」と伝え、身辺整理を始めている。すでにこの頃には筆を置く決心をしていたようだ。

引退生活に入ったかのように見えたブラームスだったが、翌年の1891年の春、それまで関わりのあったドイツ・マイニンゲンの宮廷オーケストラのクラリネット奏者リヒャルト・ミュールフェルトが演奏するモーツァルトのクラリネット五重奏曲を聴き、感銘を受ける。ブラームスはその場で何時間もミュールフェルトの練習に聴き入り、クラリネットの表現の可能性と限界を研究した。同年夏には『クラリネット三重奏曲 イ短調』Op.114 と『クラリネット五重奏曲 ロ短調』Op.115を一気に書き上げた。

クラリネットには主にイ調の管と変ロ調の管の2種類あるが、この曲では管が長く、深く温かみのある音色が特徴で、ミュールフェルトも得意としたイ調の管を使用する。

この作品は、全部で4つの楽章から成る。

第1楽章 Allegro

内的なエネルギーを持つチェロの第一主題の旋律を、クラリネットが引き継ぎ、緊張感を保ったままピアノの3連符に受け渡される。曲の初め22小節ほどで早くもひとつめのクライマックスを迎えるが、その後も3連符や拍子の拍がずれて聴こえるヘミオラなどブラームスが得意とするリズムマジックによって曲は推進力を失わずに展開していく。曲中では度々モーツァルトがクラリネット五重奏曲や協奏曲でも用いたイ長調に転調する。クラリネットが柔らかく響き、僅かの時間ほんのりと陽が差したような暖かさにつつまれる。終結部のポコ・メノ・アレグロ（アレグロの勢いを弱めて）では、暗く重たい足取りで始まるが、展開部でも繰り広げられた息の長い16分音符の各楽器への受け渡しによって締め括られる。たどり着いた最後の和音はふたたびイ長調の響きに変化する。

第2楽章 Adagio

第一音はクラリネットの澄んだ、真っ直ぐな音から始まる。チェロとピアノはその優しく温かみのあるメロディにdolce（ドルチェ：音楽用語で柔らかくという意味）で寄り添う。クラリネットの旋律が動き出すとともにピアノはゆったりとした足取りで歩調を合わせ始める。曲を通して一貫した主題を扱い展開は激しくないが、和声やリズムがゆるやかに変化し次第に熱を帯びてくる。老齢に近づいたブラームスが若き日の頃を思い出して胸を熱くしているかのようだ。

第3楽章 Andantino grazioso

優雅で軽やかなワルツ風の舞曲。中間には2つのトリオ部分を含む。明るく爽やかな曲調は初夏にアルプスを吹きぬける風を思わせる。ブラームスが作曲当時に滞在した、オーストリアのザルツブルグ南東のバート・イシュルという保養地の風土の影響だろうか。この心地よいワルツは、もしかしたら南ドイツを起源とする民族舞踏から派生したレントラー(Ländler)に近いかもしれない。

第4楽章 Allegro

ブラームスが好んだハンガリー風の曲。目まぐるしく現れる3連符型のリズムや変則的な拍子などはその特徴である。この最終楽章は短くまとまっているが、きまぐれに拍子やリズムが変化したり、結尾部からピアノの最終音に落ちるまでに増していくスピード感は、ハンガリー音楽に心酔したブラームスの表現の巧みさとスケール感を表しているようだ。

中島 杏子 NAKAJIMA Kyoko (チェロ)

東京藝術大学器楽科チェロ専攻卒業。在学中、パシフィック・ミュージック・フェスティバル (PMF)2003/2004、第5回別府アルゲリッチ音楽祭をはじめ国内外の音楽祭に参加。その後、ドイツに渡りケルン音楽大学アーヘン校修士課程を修了。帰国後2010年から、札幌を拠点に活動を開始。北海道内で主にソロ・室内楽の分野での演奏活動に加え、コンサートの主催・出演、レクチャーのほか、小・中学生を対象としたアウトリーチや、映像、ダンスなど他ジャンルのアーティストとの共演なども積極的に行う。

NHK札幌放送局主催『北の文芸館』公開収録 ('15,'16)、北海道文化財団主催『赤れんが音楽会』 ('16,'18)、道銀文化財団主催『しりべしミュージアムロード・コンサート2018』などに出演。

近年は室内楽での活動に力を入れており、ヴァイオリンとチェロのデュオユニット『VirtuRose ヴィルトゥローズ』、弦楽四重奏団『クアルテット・ポッポ』、両アンサンブルのメンバーとして定期的に自主公演を開催し、レパートリーを開拓している。

現在、エルム楽器講師、札幌大谷大学音楽学部非常勤講師。

WEBサイト：<http://nakajimakyoko.com>

恩田 佳奈 ONDA Kana (ピアノ)

広島県出身。東京藝術大学音楽学部器楽科を卒業。同大学大学院修士課程ピアノ専攻修了。ドイツ・フライブルク音楽大学ソリスト・ディプロマコースを首席で修了すると共にドイツ国家演奏家資格を取得。レプティンピアノコンクール(ドイツ)優勝。リヨン国際ピアノコンクール(フランス)ファイナリスト。ソリストとして広島交響楽団、東京ニューシティ管弦楽団、スロヴァキア・レディス室内楽団、フライブルク音楽大学管弦楽団、藝大フィルハーモニア管弦楽団と共演。

2017年ファーストアルバム「ショパン バラード全曲」をリリース。東京藝術大学音楽学部ピアノ科非常勤講師を経て、ソロ演奏を中心に室内楽にも精力的に取り組んでいる。日本演奏連盟会員、全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)正会員。

黒岩 真美 KUROIWA Mami (クラリネット)

遠軽高校卒、国立音楽大学卒業。ロータリー財団、北海道文化財団の奨学金を得て、パリ・エコル・ノルマル音楽院に留学。同音楽院をクラリネット科一等賞、室内楽科満場一致の一等賞にて修了。ピカルディ音楽コンクール一等賞受賞、フランス国際音楽コンクールクラリネット部門一等賞受賞、同コンクール室内楽部門満場一致の一等賞受賞。第118回日演連推薦新人演奏会にて札幌交響楽団と共演。第1回クラリネットアンサンブルコンクールグランプリ受賞。2019年湧別町ふるさと応援大使に就任。苫小牧市文化奨励賞受賞。

現在、札幌大谷大学非常勤講師、シエナウインドオーケストラ クラリネット奏者。